

教育のグローバル化が進んでいる

東京都立晴海総合高等学校
キャリアカウンセラー

千葉吉裕

今、日本の教育界は、賢さの国際競争にさらされている。

これまで、日本の中では、入学試験の得点率を指標に、賢さを判断していた面が否めない。「〇〇大学〇人合格！」などの宣伝文句に、良い教育を施し子どもたちを賢くしている学校とする学校選択の基準が広がっている現状は、賢さの判断を入学試験に偏重している証拠ではあるまいか。

日本の学力型の大学入試は、学力を測定するために、これまでの学習達成度を調べるように作られている。そのため、問題作成者は、高校の教科書を分析し、学習指導要領という高校の教育課程の編成基準になる公文書を読み込み、逸脱しないように作成しようとする。日本の大学入試問題は熟慮に熟慮を重ねて作られており、良問も多いのだが、統一した教育制度が国内の隅々まで浸透している日本だからこそ成り立つ入試になっており、国内の教育を受けていることを前提に、公平に得点を競うようできている。

しかし、日本の教育制度が他国の教育制度と同じかと言えば、そのようなことはない。すると、一見公平な大学入試だが、家庭の事情などで、他国の教育制度を受けてきた生徒にとって、公正な選抜試験ではないのだ。かつては、海外生活の長い児童生徒は決して多くはなかったが、経済活動のグローバル化によって、児童生徒の多様化が進んでいる。外国籍の児童生徒や、

海外生活の長かった児童生徒が教室にいるのが普通になってきている。

万能的な試験のように捉えられがちだった学力判断型の大学入試だが、それはもはや幻想に過ぎない。日本の学力型入試は「日本人による日本人のための日本人の入試」といった試験なのである。

そこからの脱却は、すでに始まっている。今、急速に進められている入試改革であったり、高校教育改革であったりと、制度そのものを改めようとする動きや、能力指標や育成すべき人物像の検討などの理論構築、教育プログラムの開発など現場における実践などが行われている。新しい取組が行われているのだ。ただ、自分の経験でしか物事を捉えられない人が多く、「猫に小判」といった感じで、取組自体に十分な価値を見いだせない人が多いのは残念である。

近年、ガラパゴス化した日本の入試に風穴をあける教育プログラムが広がっている。その一つが、国際バカロレア機構（本部ジュネーブ）が提供する国際的な教育プログラムだ。文部科学省は、グローバル人材育成の観点から、我が国における国際バカロレア（IB）の普及・拡大を推進しており、認定校も増えつつある。IBが育成しようとしている学習者像として、「探究する人」「知識のある人」「考える人」「コミュニケーションができる人」「信念をもつ人」「心を開く人」「思いやり

のある人」「挑戦する人」「バランスのとれた人」「振り返りができる人」の10の人物像を掲げ、国際的な視野を持った人材を育成することに努めている。このような人材育成を目標に、設定された知識の領域を探究的に学習するプログラムが用意されている。単に知識を獲得するのではなく「知識とは何か」「知識をどう獲得すればいいのか」「知識をどう使いこなすか」といった課題について、子どもたち自ら課題を設定し、学習していくため、生涯にわたり、あらゆる知に対して学び続ける態度が育成されることが期待される。

この教育プログラムを受けることによって、国際的に通用する大学入学資格が取得でき、世界の主要大学の入学審査にも活用されている。国内の大学でも、大学入試に用いられており、東京大学や京都大学、大阪大学などでも活用されているのだが、ご存じの方は決して多くはない。

今日、グローバル化の影響だけではなく、人工知能の発達やインターネットの普及により、学びの内容や方法は大きく変わろうとしている。インターネットの普及で知識を収集することは容易になり、それを分析する作業は人工知能でもできる。お決まりの手順で答えを見いだすことは、人工知能の得意とするところで、人間が勝てるはずはない。人工知能にできない「賢さ」を身につけなければ、人間の頭脳が存在意義はなくなってしまうだろう。